

## 事務局から

▼東北地方太平洋沖地震及び津南町・十日町市の地震に被災された方々、そして未曾有の巨大津波に襲われた皆様に心からお見舞い申し上げます。2万人を超える亡くなられた方々に深く哀悼の意を表します。原発の安全神話が崩れました。東電の福島原発がスリーマイル、チェルノブイリ、フクシマと警告になりました。

▼これからの教育研究所のすすめ方についての第1回目の検討委員会を、3月19日に開催いたしました。これまでの研究所の果たしてきた役割を総括しながら、財政難を抱える研究所をどのようにすすめたらよいか、会員皆さんのご意見をお聞かせ頂きたいと思えます。

▼次号106号は、これまで取り組んできた合併後の佐渡の小中統合問題―地域における子どもの育ち―について総括的に境野健児さん（福島大学）に纏めていただき、子どもを育てる地域の力を、地域の文化的活動の側面から探りたいと思えます。

（内山）

## 編集後記

▼先生の「長時間過密労働」の特集から見えてくるものは、子どもに触れ合う時間が極端に少ないという驚きです。「周辺業務」が授業以外の時間を覆い尽くしていることです。これでは創意工夫に満ちた教育が出来るとは到底思われません。

▼小中高校生を子どもにもつお母さん方、数人に聞いてみました。統計に表れた超動を示す資料だけでは、少々分りにくかったかも知れませんが、保護者と先生の感じ方の違いが現れていました。「父母と共同した教育活動」とよくいますが、お互いにこえなければならぬ溝があるように思いました。

▼今回の「この人に聞く」は、新潟水俣病の診療活動に献身的にとりくんでいる関川先生にインタビューしました。明るく気さくな先生に接して、患者さんから頼りにされる理由がわかったような気がしました。

▼「明治中期の新潟における理科教育の源流」の連載が最終回をむかえました。未開拓の分野の研究で、新しい知見を明らかに

したと評価されています。

▼この雑誌の編集をすすめている最中に大地震が起きました。被害を免れた小学校の卒業式の様子をテレビで見ました。先生も子どもたちもアノラック姿で来賓もいません。窓の外は瓦礫の山。子どもたちの健気な姿に涙しました。被害に遭われた方々にお見舞いを申し上げ、一刻も早い復興を願っています。

## にいがたの教育情報 No. 105

2011年3月31日発行

編集・発行 にいがた県民教育研究所  
発行人 小林 昭三  
〒951-8116  
新潟市中央区東中通1-86 山崎ビル  
電話・FAX (025)228-2924  
振替口座・00640-0-12332  
Eメール kyoiku@triton.ocn.ne.jp  
印刷所・神林印刷  
TEL 0254-66-7959

本誌内容の無断転載を禁じます。